

まずは、烏丸今出川東北にある同志社大南、御所北の冷泉邸へ向かおう。ここは藤原俊成、藤原定家の国宝、重要文化財の書、書き物がおびただしく残っている。定家の後、藤原為家を経て、二条、京極、冷泉と三派に分かれた。定家の一条京極第は、今の今出川寺町、京極小学校の辺り。さらに寺町二条上る所にも、「此付近 藤原定家京極邸址」の碑が立っている。他、市内で和歌に関する所といえば、新京極の中、四条を上ったところにある誠心院（現在は「せいしんいん」とも）を忘れることはできない。藤原道長が和泉式部に与えた一庵の跡とされている。（さらにここには俳人・池西言水の墓もある。）また文字通り京都の東北、真如堂近くに東北院があり、ここは謡曲「東北」に因む文学遺跡である。もとは御所の東、鴨沂高校近くに碑のある法成寺内の東北にあったので、寺名となった。誠心院には「軒端の梅」といって、和泉式部遺愛の梅がある。また木津にも、木津川が泉川と呼ばれていたゆえに、伝説の歌人・和泉式部ゆかりの和泉式部墓もある。

次に東山周辺を見てみよう。有名な円山公園の辺りは、昔、真葛が原と呼ばれ、慈円の名歌「わが恋は松を時雨のそめかねて真葛が原に風騒ぐなり」（新古今一〇三〇、恋一）が知られている。そうしてこの近くに、西行庵（芭蕉堂も）がある。西行はここ円山公園内の双林寺や長楽寺等の東山に草庵を結んだ。その円山公園

## 車で巡る 京都の“和歌”の史跡

前 兵庫県立川西北陵高等学校  
小田剛

を下りた辺りが祇園であり、そこには保元の乱で敗れ、讃岐の白峰に流された崇徳天皇廟がある。またその崇徳院の怨霊をなだめるためにつくられた「怨霊しづめ」、鎮魂の白峰神社——飛鳥井家（雅経など）の邸宅跡——が今出川堀川東北にある。この天皇はなかなかの歌人であり、百人一首では、七十七「瀬を早み岩にせかるる滝川のわれてもすゑにあはむとぞおもふ」の歌がとられている。また西行の歌にも院は登場し、さらに上田秋成の雨月物語（「白峰」）にも記述がある。

次に南の東福寺近くの南明院の南の俊成の墓を訪れることとする。業仲禅師の墓を中央にして、大きいほうが俊成の墓、小さいほうが浄如尼の墓とされており、さらに吉山明兆の墓は俊成墓の右にある。定家の父俊成は法性寺内で没したとされ、東福寺は法性寺の境内であるので、この位置でほぼ間違いないといえよう。この俊成は五条、三位入道といわれ、邸宅は五条であるが、今の五条ではなく、松原通がほぼ昔の五条に相当する。今の烏丸松原下ルに俊成社があり、俊成町の名が残っている。邸は五条京極との説もある。俊成は九十一歳まで生き活躍し、天寿を全うしたといえよう。因みに子の定家も八十歳で亡くなっており、この御子左家の人達は長寿の家系といえよう。

次には西、西方極楽浄土の地とされ、隠遁の里である嵯峨野へ向かおう。小倉百人一首で名高い小倉山は二九二メートル、歌枕であり、亀山ニ亀尾山ニ小倉（暗）山とされている。（小倉）百人一首のものは百人秀歌であり、二つは少しばかり歌などが異なっている。百人秀歌には、百人一首の末の二人、後鳥羽院、順徳院の歌がなく、源俊頼の歌も異なっている。今までは百人秀歌のほうが先行するといわれていたが、百人一首のほうが先だという説もあって、いろいろ考えさせられることが多い。そして小倉山は「小倉山峰の紅葉葉ころあらば今ひとたびのみゆきまたなん」（百人一首二十六、藤原忠平）と歌われ、九〇七年の作である。オグラ山は大和にもあるので、間違わないようにしてほしい。そして円山公園で触れた西行も、僧で全国行脚ゆえに嵯峨野にも庵をかまえた。向井去

来の墓の隣に西行の井戸と称するものがある。西行は旅に生き、松尾芭蕉は笈の小文でわかるように、非常に西行を、宗祇、雪舟、千利休と共に敬慕している。その西行は、西から白峰、高野山、伊勢、富士山の見える東海道、鎌倉、平泉などを旅し、その跡を慕って芭蕉も日本各地を旅したことは周知の事実である。河内の弘川寺で没したとされるが、京郊外という説もある。そうして北嵯峨の大覚寺は、よく時代劇のロケに出てくるが、光源氏のモデルの一人である藤原公任の百人一首五十五の名歌「滝の音（糸）は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」の名古曾の滝で知られる。大沢池の北にあるのだが、かつて訪れた時には、流れがつかられていて驚きであった。歌でわかるように、流れがないはずなのであるが……。また源氏物語に言及される嵯峨清凉寺の西に厭離庵があり、その横にささやかな為家墓も存在する。この厭離庵は、定家小倉山莊跡、さらに宇都宮頼綱の山莊跡の地であり、庵内には二条家古墓、柳（硯）の水、定家塚などがある。先述の小倉百人一首の舞台である。ふだんは拝観謝絶であるが、観光シーズンには公開もしている。

京の東北の大原へ行こう。有名な寂光院近くに良選法師旧房跡があり、その南に芹生の里郎がある。著名な良暹の百人一首七十一「さびしさに宿を立ち出でて眺むればいづこもおなじ秋の夕ぐれ」は、この里の秋景を歌ったものと伝えている。因みに百人一首の次歌、七十一「夕されば門田の稲葉おとづれて芹のまろやに秋風ぞ吹く」（源経信）は、京の西・梅津の景である。その大原の西隣の貴船は、有名な和泉式部の名歌「物思へば沢の蛭もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」で知られる。貴船神社は、都の北方で、皇居の用水とされた賀茂の水源地にあたるため、水を司る神を祭神とされるに至ったのである。水ゆえ恋愛の神でもある。いうまでもなく大原はもと普通名詞であり、奈良県にもあつて、万葉に出てくる。また「大原や小塩の山」と歌われる大原は、京都の南西、この大原と正反対の大原野神社の辺りであることも言い添えておく。この大原野神社は藤原氏の氏神である春日大社を勧請したものであり、境内には鹿の石像が飾られている。三千院などある、この大原に近接して比叡山（延暦寺）が控えており、この寺は国家鎮護の寺として（国家）権力と結びつき、重んぜられた。天台座主（四回）であつた慈円の百人一首九十五「おほけなくうき世の民におほふかなわが立つ柵に墨染の袖」は、特に知られる。

さて京都の南では、JR玉水駅近くに、六玉川の一つ井手の玉川が流れており、「山吹」や「蛙」などで名高い。古今集二二五「かはづなく井手の山吹散りにけり花のさかりに逢はましものを」（春下、読人しらす）は、ここを歌つたものであり、芭蕉の「古池やかはづとびこむ水の音」は、この世界を俳諧化したものである。そしてその北の伏見では、深草が特に著名で、俊成の自讃歌で、鴨長明の無名抄にも言及されている「夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」（千載集二五九、秋）が忘れがたい。この歌は古今集や伊勢物語の、在原業平と深草の女との贈答を前提にしなければ、この歌の読解と鑑賞は不可能である。詳しくは千載集やこの歌の注釈に拠られたいが、深草には鶉が付きものである。さらに伏見の東の山を隔てた山科には、小野の地があり、それゆえに小野小町の邸跡と伝える随心院があり、小町ゆかりの史跡が多い。小町の史跡は、和泉式部同様、全国各地にある。そして花山寺（元慶寺）近くに僧正遍昭墓がある。遍昭は俗名を良峯宗貞といい、百人一首十二「天つ風雲の通路吹きとちよをとめの姿しばしとどめむ」の歌で名高い。